

D—6 食料費構造の現状と将来

お茶大家政 ○古村 靖子
伊藤 秋子

1. 伊藤秋子「エンゲル係数の現状と将来」に引きつづき、戦後20年間の食料費構造、とくに家庭生活に重大な意義をもつ穀類費と動物性食品費の変動を考察する。

2. (1) 総理府統計局：家計調査の結果に基づき、昭和22年から40年までの食料費の変動を分析する。

(2) (1)の結果から得たそれぞれの食料費の変動に傾向曲線をあてはめ、今後10年間の傾向を推計する。

3. (1) 穀類費の割合は昭和22年から25年までは増大し、それ以降はごく緩慢に減少してきた。

(2) 動物性食品費の割合は昭和22年から27～29年までは、やや低下の傾向を示したが、その後は次第に増大してきた。

(3) 実質穀類費の割合に logistic 曲線をあてはめてみると次のような式となる。

$$C_1 = \frac{65.27245}{1 + e^{\frac{0.7239255 - t}{-1.925272}}}$$

ただし、 t の単位は7年である。

(4) 動物性食品

$$C_2 = \frac{27.111365}{1 + e^{\frac{-1.402974 - t}{1.491247}}}$$

ただし、 t の単位は7年である。

穀類費の割合も動物性食品費の割合もともにこの傾向が将来持続するとみて、いまは10年間の値を推計する。